

国文学研究資料館報

第37号

平成 3 年 9 月

演能記録データベース研究の

経過と展望

竹本幹夫

平成二年度の資料館共同研究

「江戸初期以前の演能記録の総合的研究」は、現在平成三年度文部省科学研究費（データベース研究）の交付を受けて、「演能記録データベース」（代表・小山弘志、国文学資料館長）として継続し、また同じく総合研究「演能記録の全国的総合調査と演能年表の編纂」（代表・表章法政大学能楽研究所所長）はこのデータベース構築のための基礎研究としてほぼ同じメンバーによって進められている。能楽研究の分野で行われた共同研究では空前の規模のプロジェクトであり、一日も早い成果の発表を心がけているが、この研究計画の発足の経緯などについて、当初からこれに関わった者の一人として、

一応報告しておきたい。

演能記録とは、能・狂言及びその略式演奏の上演記録である。広い意味での演能記録の古例は、中世の日記・記録類に散見する演能記事の類であるが、能が信長・秀吉に代表される、強大な権力者の保護を再び受けるようになった安土桃山時代ごろから、主に役者の手でこれらの番組を記録・集成することが行われ始めた。これが今問題にしている狭義の演能記録である。記録者の役目や立場に直接関わる演能の故実として採録されているため、同じ催しについて系統・内容の異なる複数の資料が存在し、後述するように個々の資料自体もまた膨大であるが、能の歴史的研究には不可欠の資料で、と

次 目

演能記録データベース	1
研究の経過と展望	1
文庫紹介「賀茂良真記念館」	3
文庫資料部事業報告	4
研究情報部事業報告	6
論文目録データベース	7
についてのお知らせ	7
整理閲覧部事業報告	8
本誌編集	8
新収資料紹介	10
評議員・委員等名簿	11
家 報	13
利用者へのお知らせ	15
平成二年度秋季学芸会開催	16

く上演曲の変遷や役者の事績を知るのに格好の材料なのである。従来はこれら演能記録それ自体の総合的な研究は、わずかな例外を除き、ほとんど企図されたことがなかった。しかしながら近年になって「丹後細川能番組」「小鼓大倉家古能組」等の織豊時代の演能記録が次々に紹介され、また能の歴史的研究の対象が次第に室町期から江戸期へと視野を広げつつあるという状況の中で、これら演能記録の重要性が再認識され、体系的把握の必要性が痛感されるにいたったのである。

演能記録には、現存最古の資料から現在にいたるまで、ほぼ固定した書式がある。すなわち冒頭に日付と公演の名目を記し、以下に曲名を列記するのであるが、各曲名の右側に数字分下げてシテの名前を書き、その左下、曲名直下にワキの名を書く。そしてワキの名の下方に二行二段書きで上段右から大鼓・小鼓、下段は太鼓・笛の囃子方役者名が記される。改行して曲名左下後方に間狂言の名を書くこともある。狂言の番組では曲名の直下にシテ以下を連記する。略式演奏の場合もおおむねこれに準じている。役者の一部を省略した記録もあるが、いずれにせよ一見ただでデータベース化したくなるような書式ではある。

資料館が昭和六〇年に、国文学の分野におけるコンピュータ利用の先駆的研究である「連歌資料のコンピュータ処理の研究」を公開したのは、能楽研究において演能記録の整理・紹介の方法が真剣に考えられ始めた時期とちょうど一致していた。法政大学能楽研究所でもやはり、昭和六〇年頃からコンピュータを用いての演能記録の整理・検索の可能性を考え始めており、その方法を模索していたから、この出版が与えた刺激はきわめて強かった。むしろこの出版に

よってコンピュータ利用への眼が開かれたと言った方が適切かも知れない。

当初能楽研究所では、独自にデータベースプログラムを業者に発注し、その頃導入されたばかりの大学の大型コンピュータの上でそれを走らせることを考えていた。ところが会議を重ねた挙げ句に一年たつて業者から内示された見積額が、我々国文学者の常識を越えた莫大な金額であったために、当然のことながらこの話はそのまま立ち消えとなり、昭和六一年頃には早くも演能記録のデータベース化は事実上放棄されるに至った。当時我々はワープロ専用機を使い始めたばかりのこととて、コンピュータに興味はあつたが知識はほとんどなかった。恐いもの知らずで汎用コンピュータの利用を思いついたわけである。

実は研究所で演能記録の整理・検索にコンピュータ利用を発売したのは私であつたので、このような形で折角の企画が頓挫したことを諦めきれずにいた。知識がない分、懲りることがなかった。そんな時に資料館の研究情報部長であられた棚町知彌先生とある研究会で一緒にさせて頂くこととな

り、いろいろご教示頂く中に、なんと連歌データベースプログラムが演能記録データベースにそのまま流用できる可能性があることを知つたのである。

その後私は棚町先生と何度かお打ち合わせをし、同じ研究情報部の山中光一先生にもご紹介頂いて、演能記録の具体例をお見せして処理可能かどうかのご検討をお願いした。そして連歌資料データベースのプログラムによって演能記録を整理・検索することが十分可能であることを確信し、資料館のプログラムを利用して頂くことも可能であるとの手ごたえを得た。そのことを能楽研究所で表章先生に報告したところ、先生も強い興味を示された。そこで棚町・山中両先生のお二人と表先生とで、資料館の連歌資料データベースの利用の可能性についてご相談頂くこととした。能楽研究所の日記に、平成元年四月二十五日初めて両先生御来訪の由が見える。

能楽研究所としては膨大なデータを所有し、コンピュータ処理の必要も痛感していたが、予算的・技術的に独自の方法を取ることが不可能であつた。一方資料館としては連歌資料データベースのプロ

グラムがほぼそのまま他分野でも応用可能であるならば、コンピュータを利用した文学研究の今後に大きな期待を持てるわけである。話はとんとん拍子に進み、同年秋季にはメンバーを集めて私的な研究会を持つことが出来た。「私的な」と言つたが、人材その他で資料館のご配慮を得た研究会であり、とくに小山弘志館長や棚町・山中両先生をはじめとする研究情報部には手厚いご指導・ご支援を賜つた。

平成二年には前述のごとく資料館の共同研究に採択され、館内から小山館長・棚町前研究情報部長・山中研究情報部長・樹下文隆助手、館外の研究者として表法政大学能楽研究所長・橋本朝生山梨大学助教(当時)・三宅晶子目白学園短期大学専任講師・表きよし国士館短期大学専任講師・竹本が参加して、予算的な裏付けのある正式な研究会として発足した。本年からは科学研究費の交付を受け、落合博志法政大学専任講師・山中玲子東京大学専任講師も新たに加わつて現在に至つている。

演能記録データベースが連歌の場合と相違するのは、データの入力を我々自身が行うという点である。原資料を翻刻してから入力

業者に発注するのは二度手間になるので、最初から自分達で入力するわけである。たまたまメンバー全員がパソコンかワープロを所持していたところから思いついたり方であつた。これは予算の軽減に貢献するところ大であつたが、なかなか大変で、とくに年齢的に本務校でこき使われることの多い世代には辛いノルマになっているのは否めない。入力をアルバイトに依頼し、こちらは校正だけを担当すると仕事はかなり効率化出来るのだが、色々な試行錯誤の過程でわかつては来た。ただし研究者にとつてはこの作業は必ずしも単純労働というわけではなく、入力するだけでその時代の能界の動向がおおむね把握できるわけであるから、メリットも大きい。アルバイトを併用しつつも、基本的には自ら入力作業を担当するほかはあまりない。それに文献の写真から、直接コンピュータに入力出来るようなアルバイトは、きわめてまれでもあろう。

演能記録データベース構築にあつたの最も大きな問題は、何をどう検索するかである。それが確定しないと、データ記入要領や凡例も決まらないことになる。我々

は当初は連歌資料データベースの記入要領をほぼ踏襲し、各項目(フィールド)の定義や名称もおおむねは前例に従う方針だったが、やはり分野が違うと同じようには行かないもので、作業がある程度まで進んで、データベースというものについてそれなりの知識・経験を積んでくると、こんな検索がしたいといった独自の要求が必ず出てくるのである。従って一見すると連歌データベースとはかなり相違した印象になりつつあるが、実は基本的なプログラムはほぼ連歌のそれに同じはずである。

演能記録には一点で数冊に及ぶ大部の資料もままある。さらには1データの情報量が異常に多いことが特色で、例えば一日の公演全体を1件の親カードとそれに付属する能・狂言の曲目ごとの子カードに入力するわけであるが、大半のデータでは一日に十番前後の能と五番前後の狂言が演じられ、全データの半数以上は、能では十名近く、狂言では三名以上の出演者名が記される、といった具合である。それらのすべてに加えて、演能の名目、場所、主催者、特記事項や考証注記なども記入していくのであるから、すでに連歌データベースという実績と技術力を持ち、しかも大容量を誇る資料館のコンピュータでなくしては、可能な研究プロジェクトと言えよう。

当面の採録対象となる演能記録は江戸前期までを中心に約五十点ほどになるが、これはデータの総量からみて決して少ない数ではない。その範囲は幕府の演能記録のみならず、地方・諸藩の記録にも及ぶはずである。それらに加えて内閣文庫蔵『柳営日記』に代表されるような江戸幕府の日記類も、狭義の演能記録の不備を補って余りあるので絶対に看過しえない。室町期の日記類の演能記事も、能勢朝次博士の『能楽源流考』以後たえて集成されていないから、このさい見直して置きたい。等々、メンバーの拡充に応じて採録対象は次第にふくらみつつあるが、現在それら諸資料をリストに従って整理収集しつつ、順次入力作業を進めているところである。

このデータベースが公開されれば、室町末期から江戸時代までの能役者索引が完成することになる。上演曲目索引も同様である。上演曲目と主な出演者を組み合わせ、一見してその日の番組内容がわか

(5頁へ続く)

文庫紹介⑬

浜松市立賀茂真淵記念館

浜松市立賀茂真淵記念館は、浜松を家郷とする真淵の業績を顕彰する目的で、昭和五十九年十一月に開館された。当館の管理、運営は、市教育委員会と社団法人浜松史蹟調査顕彰会がこれに当たり、

では、石川依平「柳園詠草」の板木や本居宣長の画像の板木などがある。なお蔵書の一部は図録「館蔵名品抄賀茂真淵の画像と遺墨」(平成二年刊)に収められる。

真淵およびその周辺の関係資料を収集、整理して市民はじめ一般の閲覧、研究利用に供し、あわせて特別展示や講演会を定期的に催すなど、幅広い文化活動をおこなっている。

記念館の東隣には、天保十年、浜松城主の水野忠邦等によつて勸請された、「泉居翁靈社」を起源とする泉居神社が鎮座する。当社蔵書がその蔵書の一部を奉納したことに発するが、その多くは戦災で焼失した。わずかに正平版論語や荷田春満書入「百人一首抄」、その他郷土関係資料類が現存するにとどまるが、宮司の三浦氏はその後も神道、国学関係の集書につとめ、文庫の整備を図っている。

収集資料は写本・板本類と書簡・書画・懐紙・詠草類などの掛幅からなり、その根幹をなすのは一括譲渡された岡部讓旧蔵の「岡部文庫」一本であるが、加えてその後の購入、寄贈などにより蔵書は徐々に充実し、現在約二、三〇〇点ほどに及んでいる。おもなものとしては、住吉広行・内山真龍・楫取魚彦等が描いた真淵の画像類、真淵自筆書状類、同添削詠草類、同草稿類のほか、国学家家書簡集、加藤千蔭書簡集、杉浦家詠草留書

その他であるが、変わったところ

〔所在地〕
浜松市東伊場一―二―二
電話 〇五三一四五六―八〇五〇
(文献資料部 鈴木淳)

文献資料部事業報告

松野陽一

本年度は第一回の収集計画委員会を五月十六日に開き、調査員会議(総会)は同二十三日、富士客員教授の講演、当館蔵CD-ROM、論文検索のデモンストレーション、有志による懇親会と多数の御参加をいただき盛況裡に終了した。

本年は今も続く雲仙岳噴火などの自然災害や海外の大きな社会変動、そして天候不順が作業に少なからず影響を及ぼしているが、夏休みには調査に収集に積極的に御協力いただき、その成果が続々集まりつつある。感謝したい。

平成二年度国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年三月末までに左の九五箇所(予備調査II*印を含む)の所蔵資料計七六二九点を調査した。

北海道東北地区(順不同、敬称略、一部略称、以下同じ)

北海学園大学附属図書館(北駕文庫)・函館市立函館図書館・伊達

市開拓記念館・岩手県立図書館・秋田県立秋田図書館・東北大学附属図書館(狩野文庫)・宮城教育大学附属図書館・宮城学院女子大学附属図書館・仙岳院・山寺芭蕉記念館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・福島県立図書館

関東地区

千葉県立歴史館・筑波大学附属図書館・東洋文庫・東京芸術大学附属図書館(脇本文庫)・東京大学国文学研究室・政法大学能楽研究所(鴻山文庫)・明治大学図書館(毛利文庫黒川本)・宮内庁書陵部・東京都立中央図書館(加賀文庫)・東京都立中央図書館(特別買上文庫)・東京都立中央図書館(東京誌料)・松野陽一・松山宗平・大倉精神文化研究所・川崎市市民ミュージアム

中部地区

新潟大学附属図書館(佐野文庫)・糸魚川市歴史民俗資料館・富山県立図書館(中島文庫)・高岡市立中央図書館・金沢大学附属

図書館・加賀市立図書館(聖藩文庫)・石川県立図書館(李花亭文庫)・福井市立図書館(松平文庫)・山梨県立文学館*・山梨県立図書館(甲州文庫)*・上田市立図書館(花月文庫)・上田市立図書館(花春文庫)・名古屋蓬左文庫(尾崎コレクション)・名古屋大学附属図書館(神宮皇学館文庫)・愛知県立大学附属図書館・愛知大学図書館(菅沼文庫)・中京大学図書館・大須文庫・西尾市立図書館(岩瀬文庫)・神宮文庫

近畿地区

水口町立図書館・園部町教育委員会(小出文庫)・京都大学附属図書館(平松家本)・京都大学文学部(頼原文庫)・陽明文庫・蘆庵文庫・大阪市立中央図書館・大阪女子大学附属図書館・大和文華館・玉津島神社・高野山大学図書館*・白鹿記念酒造博物館*・温泉寺

中国四国地区

鳥取大学附属図書館・鳥取県立鳥取図書館*・可部屋集成館・岡山大学附属図書館(池田文庫)・広島市立中央図書館(浅野文庫)・光藤葆光・三原市立図書館・羽中山八幡文庫・岩国徴古館・萩市立図書

館・山口女子大学附属図書館(寺内文庫)・益田家・三隅町公民館・善通寺・鎌田共済会図書館・香川某家・大洲市立図書館・四国女子大学附属図書館(凌霄文庫)・高知県立図書館(山内文庫)

九州地区

佐賀某家・祐徳稲荷神社・長崎県立長崎図書館・島原図書館(松平文庫)・松浦史料博物館・長崎某家・大村市立史料館・臼杵市立臼杵図書館・沖縄県立図書館*・石垣市立八重山博物館*

海外

パリ国立図書館・キメ東洋美術館図書館*・チュスターピーティ図書館

二、収集

本年三月末までに左の三八箇所(所蔵資料計七四五六点を収集した)。

北海道東北地区

北海学園大学附属図書館(北駕文庫)・弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・秋田県立秋田図書館・山寺芭蕉記念館・酒田市立光丘文庫

関東地区

矢口丹波記念文庫・茨城県立歴史館・早稲田大学図書館・宮内庁書陵部・政法大学能楽研究所(鴻山文庫)・東洋文庫・東京都中央図

書館(加賀文庫)・福田秀一・松野陽一・松山宗平

中部地区
福井市立図書館(松平文庫)・名古屋
市鶴舞中央図書館・愛知県立
古屋市図書館(古俳書一)・中京大
学附属図書館・大須文庫・西尾市
立図書館(岩瀬文庫)

近畿地区

正教蔵文庫・京都大学文学部(額
原文庫)・立命館大学附属図書館
(西園寺文庫)・陽明文庫・園部町
教育委員会(小出文庫)・大和文
華館・住吉大社・大阪女子大学附
属図書館・柿衛文庫・温泉寺

中国四国地区

岩国徴古館・益田家・香川某家
九州地区
熊本大学附属図書館(北岡文
庫)・熊本大学教育学部・臼杵市
立臼杵図書館

平成三年度文献資料調査・収集計画

本年度は調査一三箇所(海外
を含む)一〇〇四〇点、収集五五
箇所(同)五七九六点の計画を立
て、順次実行に移している。

海外資料の調査・収集

昨年度の二度の予備調査、調査
を承けて、本年度も科学研究費補
助金(海外学術研究)により、バ

リ国立図書館、ギメ東洋美術館図
書館などが在任資料、併せてチェス
タービーター図書館の調査を九
月二十三日より十九日間、小峯、
山崎、竹下、樹下、深沢が出張し
て行なう計画を立てている。

収集は右諸館の他、カリフォル
ニア大学パークレイ校、イェール
大学スターリング記念図書館に出
願済みである。

第四室

本年度は客員教授として駒沢大
学文学部の富士昭雄教授をお迎え
し、近世小説類の調査・収集のほ
か、特定研究の書誌学用語の整理
などの御助力御指導をお願いして
いる。併任助教授には、前期は静
岡大学人文学部の神田龍身助教授、
後期は琉球大学法文学部の関根賢
司助教授をお願いしている。

その他

地区会議は、中国四国地区は十
一月十九日に徳島市で、中部地区
は十一月二十二日に金沢市で開催
の予定。

「古典籍学の確立・体系化のた
めの研究」のテーマで、昨年度に
引き続き特定研究を館外の方々と
共同で行なっている。古典籍学用
語集作成、奥書刊記集成などの作

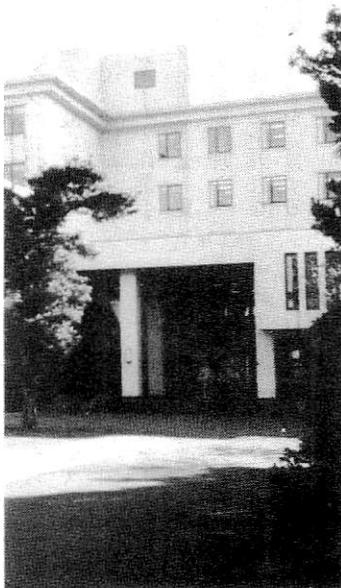
業を進めている。第一回の会合を
六月二十八日に行なった。

三月三十一日付で長谷川強前文
献資料部長が停年退官され、名誉
教授の称号を授与された。後任の
部長職は本年度からわたくしが担
当することになった。

四月一日付で新藤助教授が教授
に昇任、第三室の長谷川教授の後
任には鈴木淳助教授を迎えた。室
長は第一室新藤、第二室小峯、第
三室岡、第四室松野の新体制とな
った。

調査研究報告第一二号を編集刊
行し、宮次男前客員教授「和字絵
入往生要集」以下八本の研究報告
を収録した。
本年度も変らぬ御指導、御協力
をお願いしたい。

(文献資料部長)



(早稲田大学文学部助教授)

(3頁より)
るような、資料別・年代順の基本
情報一覧も可能となろう。もちろ
ん特定の役者の初演と最終出演の
年月日、上演曲目の時代的傾向な
ど、今はまだ調査に数日を要する
こともあるような情報も、たやす
く検索出来るようになるし、我々
の総合研究の方での最終目的であ
る、地区別の演能年表作成のため
の基本資料も容易に揃えることが
出来よう。能・狂言や謡が同時代
以降の文学に与えた影響は甚だ大
きく、能役者には俳諧を嗜むなど、
他分野とも関わる人物も少なくな
い。このデータベースは、中世後
期から近世にいたる国文学一般の
考証にも資するところ大といって
よいのではなからうか。

研究情報部事業報告

新井 栄 蔵

平成二年度は、新たにデータベース室が設置され、同時に関連の室名の変更があつて、今後、次の四室の体制で運営される事となった。

情報資料室(旧 情報室)

情報分析室(旧 編集室)

データベース室(新設)

情報処理室

データベース室は、当面、従来データベースサービスマン(平成三年四月以降は論文目録データベースサービスマン)として改組)が担当した国文学論文目録データベースの作成・研究・業務を移管して引き継いで実施している。その他のデータベース関連業務は、今後、館としての運営方針の策定に伴い随時に加除されることになる。データベース室長は、当年度は研究情報部長が兼務する。平成二年十月から平成三年三月までの間、中村康夫助教授(鳥取大学医療技術短期大学部助教授)の併任が発令された。

他の室の研究・業務の担当は従来の通りである。

研究情報部長は、定年退官した山中光一教授の後任として、新井が担当する。

情報分析室は、転勤した末澤明子助手の後任として佐々木孝浩助手が着任した。

情報資料室

国際日本文学研究集会(第14回)を十一月十六、十七日に開催

約七〇名の参加者で、成功裡に行うことができた。来年度(平成四年度)は、当館設立二〇周年にあたるため、規模をやや拡大した集會を計画しており、国際日本文学研究集會委員会では、その立案検討を開始した。

新聞情報の収集は、従来どおり進めているが、劣化した切りぬきについては、当面コピーをとって保存の永続化を計ることとなり、その作業を開始した。

館報は例年どおり、年二回の刊行を終えた。

情報分析室

【国文学年鑑】(平成元年版)を平成三年三月末に刊行した。

組版のCTS(コンピュータ・タイプ・セッティング)化に伴う編集・組版の問題が多岐に亘って未解決の部分が多く、その解決に努力した。プログラム・作業手順・コンピュータ辞書(語彙一覧表)、編集作業のための管理システムなどの改善・開発に追われながら、同時に編集作業を完遂する点から考えると、既に編集担当者の努力も限度にきている。CTSによって組版・印刷することは、時代の趨勢であろうが、そのCTSによる編集作業を前提として考えるならば、【国文学年鑑】はどう編集するのが現実的なのかを根本的に検討し直さざるを得ない時期にきている。

平成二年度の事業報告に併せて、平成三年度には、その具体的な検討に移りたいと考えていることを付記しておく。

【紀要】も例年どおり刊行をおえることができた。

データベース室

データベースサービスマン(旧データベースサービスマン)の作業を移管して、その目録データ(昭和六十年分から六十三年分までの四年分、約四万件)の改

善・作成をおこなうとともに、国文学年鑑マスターから国文学論文目録データベースマスターへの転換システムの改善、国文学論文目録データベースのデータ作成システムと作業手順の改善、国文学論文目録データベース改善・拡張のための実験システムの開発などを実施した。

同時に、平成四年度の国文学論文目録データベースのオンラインサービスの開始を前提に、データベースサービスマンとともに、管理部関係部門の協力を得て、サービス計画の策定、サービス開始の準備、実験モニターの依頼準備などをおこなった。

情報処理室

平成二年度事業は、以下のよう

(一)目録作成

定常的な業務として、

①国文学研究資料館蔵マイクログ

資料目録(一九九〇)

②国文学研究資料館蔵逐次刊行

物目録(一九九一)

の版下作成を行った。

(二)データ入力等

上記目録用データ及びその他のデータ合せて一〇〇、七十一件

のデータ入力を行った。

なお、科研費に基づく岩波版日本古典文学大系本文データの第三次分の入力・蓄積(約一〇〇万字、三三五作品)を行った。これにて、古典大系が全作品データベースの入力が完了した。次年度以降校正作業を含め利用システム開発を行い、出来る限り早期にサービス開始を目指している。

また、業務用として一〇一字、研究用として三〇〇字のJIS外字の作成を行った。

(三)新規システムの導入

特別設備費によって古典本文データベース研究用等のためのプロバイダシステムの導入を行った。クボタコンピュータ製MipsRC3260、ソニー社製NEWS、アップル社製Macintoshによる複合システムである。また、これらを含め館内ワークステーションを接続し相互利用するためのLANとして、イーサネットを研究情報部に敷設した。

(四)システム開発

以下のシステム開発を行った。

①日本古典文学作品本文データ

ベースの高度活用のための総合システム

文字頻度リスト作成、語彙検索、データ転送等、本データベースの定型的な利用処理機能の実現と、パーソナル環境支援のためのシステム開発を行った。

②原文献資料データベースの監視機能をもつ運用管理システム

従来、個別に開発を行ってきた原文献資料データベースシステムのサブシステム群を総括し、一元的に運用管理するシステム開発を行った。効率のかつ一貫性の高いデータベース形成・運用を目的としている。

③プロバイダシステムの基本的な環境システム

平成二年度に導入したプロバイダシステムの基本システム及びネットワークを中心とした環境システムの開発を行った。

(五)「国文学とコンピュータシンポジウム」の開発

平成二年十二月十四日に第二回「国文学とコンピュータシンポジウム」を開催した。今回はテキストデータベースと日本語処理について諸問題を討議するという目的で八件の講演とパネル

ディスカッションが行われた。約一〇〇名の参加があり、活発な質疑があり盛会であった。

(六)人文系共同利用機関情報システム連絡会

今年度は二回開催した。

一回目は放送教育開発センターで開催し、主にデータベースと著作権について、二回目は国際日本文化研究センターで開催し、研究情報の相互交流方法について意見交換を行った。

国文学論文目録データベース試行とサービス開始についてのお知らせ

研究情報部データベース室

国文学研究資料館報第三十四・三十五・三十六号でお知らせしましたように、来年度に当館で開始の方針で進めております国文学論文目録データベースのオンラインサービスに向け、現在、館内の試行をはじめ、全国各地の複数大学に依頼してのモニターによる試行などを行っております。また国文学関係の学会や諸大学における広報やデモなどもできるだけ多く実施するよう計画しております。

来年度サービス開始時には、とりあえず、昭和五十八年から平成元年まで七分分の国文学研究論文約七万件のデータを検索用に提供できるように考えておりますが、開始までには、さらにシステム上の整備や、データの修正や追加、検索辞書の手当てなど、さまざま

一回目は放送教育開発センターで開催し、主にデータベースと著作権について、二回目は国際日本文化研究センターで開催し、研究情報の相互交流方法について意見交換を行った。

研究支援態勢の一貫としてこのうしたコンピュータによる検索方法は、国文学の世界では必ずしもまだ、一般化しているとはいえない現況にあります。国文学研究者皆様からのさまざまなご意見やご要望がありましたら、遠慮なく当館データベース室までお寄せ下さいますようお願いいたします。

研究支援態勢の一貫としてこのうしたコンピュータによる検索方法は、国文学の世界では必ずしもまだ、一般化しているとはいえない現況にあります。国文学研究者皆様からのさまざまなご意見やご要望がありましたら、遠慮なく当館データベース室までお寄せ下さいますようお願いいたします。

整理閲覧部事業報告

本田 康 雄

当部が担当する業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は、平成二年度も順調に進展した。

閲覧係を情報サービス係に変更した。

(一)情報サービス室

(1)資料の受入

保存用ネガフィルムの外部保管委託は、昭和六十三年度収集分一、〇一リールを追加委託し、総計一七、〇八〇リールとなった。例

年実施している監査に際しては、監査実施要領に基づき当部から検査員を派遣し、保存用ネガフィルムの保管状況等を検査した。

部内の異動は平成二年四月一日付で整理閲覧室に参考普及係が新設され、鈴木閲覧係長が係長を併任することとなった。また、同年六月八日付で整理閲覧室を名称変更した情報サービス室に事務官室長が新設され、益田義孝事務官

(四月一日付の異動で、北海道大学附属図書館情報システム課長から管理部門として転入)が着任した。これにあわせて、係の名称についても整理係を情報管理係に、

閲覧係を情報サービス係に変更した。

平成二年度の受入資料数は、マイクロ資料(ロールフィルム一、〇一リール、紙焼写真本二、七四冊)、図書(二、九四六冊)、

逐次刊行物(継続受入雑誌一、七二誌―全所蔵タイトル数三、四五七タイトル)、雑誌製本(三三三冊)であった。その結果、平成二年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

(2)マイクロ資料の整理

【国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九九〇年】を刊行した。尊経閣文庫ほか二十三文庫、七、四九〇点の資料が収録されている。

(3)図書資料の整理等

新規受入れの図書(和古書を含む)約二、七〇〇冊を整理した。学術情報センターの目録所在情報サービスを利用した、目録業務のシステム化の検討に着手し、その

利用申請を行った。和古書の補修を例年通り行った。

(4)古典作品典拠ファイル作成事業

本事業は、岩波書店刊「国書総目録」のデータベース化をはかるものであり、パンチ・校正作業、

入力・変換・加工(読み付与、著者名コントロール等)作業から成るが、本年度でパンチ・校正作業を完了した。約三十七万件である

今年度は約四七、〇〇〇件を処理し、累計十六万件に達した。

(5)古典籍総合目録作成事業

前年度末の目録刊行をうけて、十年間の事業をふりかえり、作業の概要や問題点を総括した報告書を「古典籍総合目録―データベースの構築と出版」と題し、刊行した。

データ作成は引き続き行い、書誌データ一万件余をはじめ、著作

著者の典拠データを作成した。また、目録編集時にCTS(コンピュータ製本システム)から出力した校正ゲラを精査した結果に基づいて、現行データベースの修正作業を行った。

(6)閲覧業務

平成二年度は、来館利用による入室者数が七、八一九人(一日平均

三一人)、文献複写が二五、七六一件(一日平均一〇二件)であった。前年度に比べて、入室者数が二%、文献複写件数が三八%とそれぞれ増加した。特に文献複写件数の大巾な増加は、複写料金の値下げの影響かと思われる。利用

所蔵資料統計

(平成3年3月末現在)

資料種別	点数	冊(リール)数
マイクロ資料	マイクロフィルム*	99,589点 21,571リール
	マイクロフィッシュ	6,237点 21,643枚
	紙焼写真本	51,959冊
図書(古書及び新刊書)	28,175点	81,325冊
逐次刊行物	3,457誌	
寄託図書	141点	178冊

*他に紙焼写真による収集がある。

登録者は、累計（三月末まで）で二四、五七七人に達した。また、相互利用（郵送による文献複写・貸出）の申込受付は、一、八七九件で、前年度に比べて二%減少した。

平成元年度から始まった当館所蔵原本（写本・版本）のマイクロ化事業第二年度の平成二年度は、約四二万コマ、二、一五五点の撮影を実施した。

また平成二年度は、五月から六月にかけて参考開架閲覧室の改装を行い、さらに三月には、三階参考閲覧室の参考開架図書と二階閲覧室の紙焼写真本との、ほぼ全面的な入れ換えを行った。

なお、例年通り、四月末から五月上旬にかけて資料のくん蒸、三月末に蔵書点検を実施した。

(二) 参考室

(1) 参考業務
日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

(2) 公開講演会及び展示会

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示会を開催した。

・公開講演会

第32回（6月23日、於当館）

「花と阿修羅」ウイリアム・ラフルーア（当館客員教授）、「風に靡く富士の煙の行方」山田昭全（大正大学教授）

第33回（10月27日、於大阪市・大阪府中小企業文化会館）

「光源氏と冷泉院」篠原昭二（東京大学教授）、「小野小町の歌の場」片桐洋一（大阪女子大学学長）

・第13回夏期公開講演会「上代の文学」（7月26日～28日、於当館）

26日 「人麻呂の創造」曾倉岑（青山学院大学教授）、「万葉の旅―遣新羅使人歌を中心に―」阿蘇瑞枝（共立女子大学教授）。
27日 「歴史学からみた古代の孤独」青木和夫（お茶の水女子大学教授）、「柿本人麻呂と大伴家持―史的背景からみたその歌風―」直木孝次郎（大阪市立大学名誉教授）

28日 「古事記と日本書紀の違い―天照大御神の扱い方―」金井清一（京都産業大学教授）、「神武紀・記の記述」西宮一民（皇學館大学教授）。

・常設展示

第44回「和書のさまざま」（4月16日～6月30日）。

第45回「上代の文学」（7月16日～9月29日）。

第46回「徒然草」（10月15日～12月22日）。

第47回「古典文学の参考図書」（1月21日～3月23日）

なお、第13回夏期公開講演会の筆録集である「上代の文学（国文学研究資料館講演集12）」を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。

（整理閲覧部長）

第19回特別展示

新 収 資 料 展

昭和63年～平成2年度期

11月1日(金)～11月29日(金)

(日曜・祝日を除く)

於：展示室



新収資料紹介 ③②

光源氏一部連歌寄合

「光源氏一部連歌寄合」は、こが含まれていることと合せて注目されよう。

ある天理図書館蔵本（銘肝腑集 本書は「源氏聞書」「六帖和調集拔書」とともに合綴され、薄茶五）の本奥書を有しており、源氏色の反故紙をもつてくるみ表紙と寄合を作ったとする「九州問答」の記事との符合、貞治三年に行阿紙は楮紙。縦二二・五寸、横一から「原中最秘抄」を伝授されて五・八寸。天文二年の書写奥書を

いることなどから、二条良基の手もつ。「源氏聞書」は作中人物と調集拔書」は、連歌寄合の形成に近なるものと推定されている。近時当館の収蔵するところとなった本書は、それら従来の推定を裏付ける記事を持つ、未紹介の新出資料であると思われる。

天理本の奥書とほぼ同内容の記事の後、「貞治四年十月之比於二条閣白殿下御談儀ノ之時被用捨云々努々不可他見云々」と、二条良基のもとで「御談儀」のあったことが明記され、さらに「于時参集人々」として、寄合作成に協力した人物たちの名が挙げられている。

なかでも「河海抄」の著者である四辻善成の名が記されていることは、善成による源氏物語講釈の聞書である「千鳥抄」にも源氏寄合

（整理閲覧部 加藤洋介）

源氏聞書
貞治四年十月之比於二条閣白殿下御談儀ノ之時被用捨云々努々不可他見云々

二時参集人々
河海抄著者四辻善成

天理本と比較するに、相互に寄合語の誤脱を訂正しうるばかりでなく、天理本ではほとんど全て無視されてしまっている、「女車」

国文学研究資料館評議員

任期 平成2年7月1日、平成4年6月30日

- 阿部 秋生 東京大学名誉教授、実践女子大学名誉教授
秋山 慶 東京女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
有馬 朗人 東京大学長
井内 慶次郎 東京国立博物館長
猪瀬 博 学術情報センター所長、東京大学名誉教授
今井 源衛 梅光堂学院大学文学部教授、九州大学名誉教授
小田切 春進 京都大学名誉教授
上田 直 日本近代文学館理事長、立教大学名誉教授
加藤 純一 東京都立中央図書館長
京極 幸多 東京女子大学長、東京大学名誉教授
児玉 純一 学術院大学名誉教授
斎藤 裕正 文化財保護審議会会長
阪倉 篤義 京都大学名誉教授
田中 義裕 京都大学名誉教授
坪井 清直 国立歴史民俗博物館長、東京大学名誉教授
尾藤 正英 大阪文化財センター理事長
林 大 国立国語研究所名誉所員
宮川 選三 川村学園女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
久保田 満 久保田文化研究所教授、九州大学名誉教授
大阪教育大学名誉教授

国文学研究資料館運営協議員

任期 平成2年8月1日、平成4年7月31日

- 有吉 保 日本大学文学部教授
伊藤 正義 大阪市立大学文学部教授
石井 進 東京大学文学部教授
稲口 勇次郎 お茶の女子大学教育学部教授
久保田 敬二 放送大学文化センター長、大阪大学名誉教授
小林 清治 東京大学文学部教授
佐竹 昭廣 東北学院大学文学部教授、福島大学名誉教授
水澤 五郎 名城大学文学部教授、京都大学名誉教授
新井 静夫 慶応義塾大学附屬研究所道尾道尾教授、向文館長
新谷 栄蔵 助計監計画研究所理事
岡本 雅彦 国文学研究資料館研究情報部長
新藤 三彦 国文学研究資料館文献資料部教授
鶴岡 実枝子 国文学研究資料館史料館教授

- 本田 康雄 国文学研究資料館整理開発部長
松野 雄一 国文学研究資料館文献資料部長
松村 隆二 国文学研究資料館研究情報部教授
森安 彦 国文学研究資料館史料館教授
安永 尚志 国文学研究資料館研究情報部教授

国文学文献資料収集計画委員会委員

任期 平成2年4月1日、平成4年3月31日

- 荒木 尚 熊本大学文学部教授
石川 真弘 佛教大学文学部教授
木村 正中 学術院大学文学部教授
服部 幸雄 千葉大学文学部教授
浅野 三平 日本女子大学文学部教授
飯田 瑞穂 専修大学文学部教授
野口 元大 上智大学文学部教授
長谷川 端 中央大学文学部教授
福井 久善 上野学園女子音楽学部教授、日本音楽料審議長
いわき 明早 早稲田大学文学部教授

文献目録委員会委員

任期 平成2年4月1日、平成4年3月31日

- 池内 輝雄 大妻女子大学短期大学部教授
揖斐 高宏 成蹊大学文学部教授
遠藤 宏 成蹊大学文学部教授
久保田 孝淳 立教大学文学部教授
小島 照彦 東京学芸大学教育学部教授
小町谷 義彦 横浜国立大学教育学部教授
滝藤 榮一 新潟大学文学部教授
野山 嘉正 東京大学文学部教授
野中 満 日本大学芸術学部非常勤講師
浜野 卓也 明治大学文学部教授
原道生 青山学院大学文学部教授
安田 尚道 青山学院大学文学部教授

情報処理システム運用委員会委員

任期 平成2年4月1日、平成4年3月31日

- 石田 晴久 東京大学大型計算機センター教授
稲岡 耕二 上智大学文学部教授
井上 如 学術情報センター教授
杉田 繁治 国立民族学博物館第5研究部教授
千代 正明 国立国会図書館総務部情報処理課長

共同研究委員会委員

任期 平成2年4月1日、平成4年3月31日

- 稲賀 敬二 放送大学広島ビデオ学習センター長
大曾根 章介 中央大学文学部教授
曾倉 岑 青山学院大学文学部教授
鳥越 文藏 早稲田大学文学部教授
中野 三敏 九州大学文学部教授
水原 一 駒沢大学文学部教授

国際日本文学研究集会委員会委員

任期 平成2年4月1日、平成4年3月31日

- アラントーニ 清泉女子大学文学部教授
桑川 光樹 明治学院大学国際学部教授
芳賀 徹 国際日本文化研究センター教授
平岡 敏夫 筑波大学文学部、言語学系教授
福田 秀一 国際基督教大学教養学部教授
山下 宏明 名古屋大学文学部教授

古典籍総合目録委員会委員

任期 平成3年4月1日～平成5年3月31日

- 浅野次郎 東京大学附属図書館事務部長
- 雨森弘行 学術情報センター事業部長
- 井坂清信 国立国会図書館図書部古典課課主査
- 柴田光彦 跡見学園女子大学文学部助教授
- 堤田精二 お茶の水女子大学文学部助教授
- 益田宗 東京大学史料編纂所所長
- 森川彰 梅花女子大学文学部助教授

国文学文献資料調査員

任期 平成3年4月1日～平成4年3月31日

- 石井由紀夫 北海道教育大学釧路分校助教授
- 上岡勇司 北海道教育大学札幌分校助教授
- 菊地仁 山形大学文学部助教授
- 田中初恵 宮城学院女子大学文学部非常勤講師
- 高橋伸幸 札幌大学女子短期大学助教授
- 竹下香織 山形女子短期大学講師
- 豊島秀範 弘前学院大学文学部助教授
- 中村一基 岩手大学教育学部助教授
- 錦村仁 秋田大学教育学部助教授

(関東)

- 青柳隆志 東京成徳短期大学講師
- 宇野敏彦 成城大学文学部助教授
- 大岡賢典 戸板女子短期大学教授
- 落合博志 流通経済大学経済学部助教授
- 表きよし 法政大学第二教養部講師
- 紙宏行 国士館短期大学講師
- 棚田知之 文教大学女子短期大学助教授
- 柳橋正博 シオン短期大学助教授
- 中嶋隆 帝京大学文学部助教授
- 播本眞一 横浜国立大学教育学部助教授
- 藤江眞一 大東文化大学文学部講師
- 古相美夫 フェリス学院大学文学部助教授
- 古野和夫 国学院大学文学部兼任講師
- 実践女子大学文学部助教授

- 湯沢質幸 筑波大学文学部言語学系助教授
- 渡辺憲司 立教大学文学部助教授

(中部)

- 荒木浩 愛知県立女子短期大学助教授
- 大島信生 皇學館大学文学部助手
- 大谷節治 神戶山手女子短期大学非常勤講師
- 木越彰 金沢大学教養部助教授
- 黒田彰 愛知県立大学文学部助教授
- 小林一彦 洗足学園津短期大学講師
- 塩村耕 青山学院大学短期大学助教授
- 島原泰雄 皇學館大学文学部助教授
- 高木善三郎 上越教育大学学校教育学部助教授
- 下原元 愛知県立大学文学部講師
- 玉城司 清見女子学院短期大学講師
- 安田俊太郎 新潟大学文学部助教授
- 山本文吉 南山大学文学部助教授
- 渡邊信和 全沢大学教育学部助教授
- 同朋学園佛教文化研究所研究員

(近畿)

- 浅見健二 大阪経済法科大学教養部講師
- 小崎俊彦 大谷女子大学文学部助教授
- 塩崎真一 神戸山手女子短期大学助教授
- 塩崎真一 相愛大学文学部助教授
- 寺前正志 甲南大学文学部助教授
- 藤田眞一 花園大学文学部講師
- 母利司朗 京都府立大学女子短期大学助教授
- 岐阜大学教育学部助教授

(中国・四国)

- 浅野日出男 山陽女子短期大学助教授
- 伊藤久薫 山陽女子短期大学助教授
- 榎木由文 鳥取大学教育学部講師
- 岡部啓一 就実女子大学文学部助教授
- 佐保田文 梅光学院大学文学部講師
- 白井亨 徳島文理大学文学部講師
- 杉本宏 安田女子大学文学部助教授
- 中川好伸 徳島大学教養部助教授
- 原水民樹 徳島大学総合科学部助教授
- 美山靖 愛媛大学文学部助教授

(九州)

- 山口眞琴 高知大学文学部助教授
- 吉山裕樹 比治山女子短期大学助教授
- 池宮正治 琉球大学法文学部助教授
- 今井明 鹿児島短期大学助教授
- 川村裕美 活水女子大学文学部助教授
- 白石一美 宮崎大学教育学部助教授
- 関根賢司 琉球大学法文学部助教授
- 妹尾好信 大分大学教育学部講師
- 園田豊 北九州大学文学部助教授
- 中道雄 佐賀大学教養部助教授
- 田中尚 鹿児島大学教育学部助教授
- 森正人 熊本大学文学部助教授
- 若木太一 長崎大学教養部助教授

国文学研究情報研究専門員

任期 平成3年4月1日～平成4年3月31日

- 青木周平 国学院大学文学部助教授
- 青山良夫 元四国女子大学文学部助教授
- 白石豊 文部省初等中等教育局教科書課教科書調査官
- 鈴木知豊 文京女子短期大学講師
- 鈴町知豊 園田学園女子大学文学部教授近松研究所長
- 辻勝見 日本大学文学部講師
- 前田雅之 東京女子短期大学助教授

共同研究員

任期 平成3年4月1日～平成4年3月31日

- 課題名「古代後記に於ける幼学書の内容に関する研究」
- 後藤昭雄 大阪大学教養部助教授
- 黒田彰 愛知県立大学文学部助教授
- 東野治之 大阪大学教養部助教授
- 三木雅博 梅花女子大学文学部助教授
- 課題名「近世漢政資料における歌舞伎・浄瑠璃記録の研究」
- 鳥越文蔵 早稲田大学文学部助教授
- 赤間亮 立命館大学文学部講師
- 岩井眞實 福岡女子学院短期大学講師
- 和田修 早稲田大学演劇博物館助手

課題名「平安和歌における修辞の研究」

- 杉谷 寿郎 日本大学文理学部教授
- 阿部 好臣 日本大学文理学部助教授
- 加藤 幸一 奥羽大学文学部講師
- 高田 信敬 鶴見大学文学部助教授
- 平沢 竜介 白百合女子大学文学部助教授
- 藤田 洋治 東京成徳短期大学講師

課題名「近世初期の禪林と堂上の文学的交流の研究——永雄・素然尚吟和漢聯句をめぐる——」

- 花田 富二夫 大妻女子大学短期大学部助教授
- 上野 英二 成城大学文学部助教授
- 菊地 明範 晩星女子大学講師
- 鈴木 健一 東京大学教養学部助手

課題名「平家物語と語り物文芸性に関する研究」

- 村上 正知 名古屋工業大学工学部教授
- 志立 正知 山形県立米沢女子短期大学講師
- 鈴木 孝庸 新潟大学教養部助教授
- 千明 守 横浜国立大学非常勤講師
- 松尾 華江 旭山女子大学人間関係学部教授
- 横井 孝 静岡大学教育学部助教授

課題名「近世地方出版文化史の研究」

- 朝倉 治彦 四日市大学経済学部教授
- 今田 洋三 近畿大学教養部教授
- 鈴木 俊幸 国土館短期大学講師
- 長友 千代治 京都府立大学文学部教授
- 中山 尚夫 東洋大学文学部講師

彙報

委員会日誌

平成三年

4月26日 国際日本文学研究集

5月16日 国文学文献資料収集

5月23日 国文学文献資料調査

7月1日 共同研究委員会(第一回)

7月19日 文献目録委員会(第一回)

7月23日 大学院教育協力委員会(第一回)

9月5日 文献目録委員会(第二回)

9月6日 国際日本文学研究集委員会(第二回)

運営協議委員会の開催について

本年度第一回運営協議委員会が平成三年六月二十四日(月)に開催され、議事は、国文学研究資料館名譽教授の候補者、教官人事、管理運営の概況、平成二年度事業報告及び平成四年概算要求について協議が行われた。

外国出張

森 安彦

渡航先 中華人民共和国
目的 アジア地域アーキビスト養成国際シンポジウム並びにアーキビスト養成に関するセミナー出席

期間 平成3年9月8日～平成3年9月14日

評議員会の開催について

本年度第一回評議員会が平成三年七月十日(水)に開催され、議事は、国文学研究資料館名譽教授の承認、管理運営の概況、平成二年度事業報告及び平成四年度概算要求について評議が行われた。

小峯 和明

山崎 誠

樹下 文隆

竹下 義人

深沢 眞二

渡航先 フランス・アイルラ
ンド

目的 在仏国文学資料に関する文献調査
 平成3年9月14日

期 間 平成3年9月23日
 平成3年10月9日

海外研修旅行

岡 雅彦

目的 アメリカ合衆国
 燕京図書館蔵古典籍
 の調査並びに目録作
 成

期 間 平成3年7月1日
 平成3年9月30日

大友 一雄

渡航先 連合王国・オラン
 ダ・ドイツ連邦共和
 国・フランス

目的 文書館・博物館の調
 査研究

期 間 平成3年9月11日
 平成2年9月25日

安藤 正人
 渡航先 中華人民共和国
 アジア・オセアニア
 地域におけるアーキ
 ビスト養成国際シン
 ポジウム並びにアー
 キビスト養成に関する
 セミナー出席

期 間 平成3年3月31日付

人事異動(平成3年3月〜9月)
 [教育職員]

○平成3年3月31日限り
 (停年退職)

長谷川強(文献資料部教授)

期 間 平成3年9月8日

(昭和女子大学就職)
 浅井潤子(史料館教授)

○平成3年4月1日付
 (任用更新)

小山弘志(国文学研究資料館長)
 (採用)

鈴木 淳(文献資料部助教授)
 (国学院大学教授から)

松村雄二(研究情報部助教授)
 (共立女子短期大学助教授から)

(昇任)
 新藤協三(文献資料部助教授)
 (同助教授から)

(転入)
 中村康夫(研究情報部助教授)
 (鳥取大学医療技術短期大学部
 助教授から)

渡辺浩一(史料館助手)
 (東北大学助手から)

(併任)
 松野陽一(文献資料部長)

(客員教授)
 富士昭雄(駒澤大学教授)

(平成3年4月1日〜平成4年
 3月31日)

(併任)
 神田龍身(文献資料部助教授)

(静岡大学助教授から)

(平成3年4月1日〜平成3年
 8月30日)

長谷川強(文献資料部教授)

○平成3年7月1日付
 (転出)

松方 純(研究情報部助教授)
 (宇宙科学研究所助教授へ)

○平成3年9月1日付
 (転入)

原 正一郎(研究情報部助教授)
 (学術情報センター助手から)

[事務系職員]
 ○平成3年4月1日付

(転入)
 松岡憲雄(庶務課長)

(岐阜大学へ)
 ○平成3年6月30日付

(辞職)
 吉池孝道(管理部長)

(財団法人日本語教育振興協会へ)
 ○平成3年7月1日付

(転入)
 六車正章(管理部長)

(文部省から)



利用者へのお知らせ

◆田安德川家資料の寄託について
 渡邊雅子・徳川宗英・徳川宗賢・徳川宗広・溝口文子・松平宗紀の各氏から、田安德川家資料の寄託を受け(本年四月一日付け)、整理中である。

内容は①田安宗武著作物類 ②田安家日誌(田藩事実、田藩御記録類聚など) ③日記・記録類・年中行事など ④有職故実 ⑤音楽関係 ⑥国文学 ⑦犬追物・馬術・弓術 ⑧書道 ⑨猿楽。
 点数は、前記六氏よりの分、四千九十二冊、三十二軸。徳川宗賢氏よりの分、十一軸。形態は概ね大本型冊子体、袋綴じ写本で、装束図・武具図などには丹念に彩色を施してある。

十月中に仮整理を終了し、十一月中には閲覧を開始する予定である。詳細は情報サービス室に問い合わせられたい。

◆マイクロ資料のサービス区分変更について

これまでマイクロ資料のサービス区分が変更になった場合、及びサービス区分について未回答であ

った原資料所蔵者から回答が得られた場合は、その都度、本欄でお知らせしてまいりました。今回、それらをまとめて掲載いたします。

文庫No	所蔵者	変更内容
25	東京都立中央図書館A↓B	
32	水府明徳会彰考館 E↓B↓E	
51	大阪府立大学附属図書館 (森文庫) X↓A	
52	伊達市開拓記念館 X↓A	
63	徳島県立図書館(森文庫) E↓A	
64	徳島県立図書館(木下眉城文庫) E↓A	
65	徳島県立図書館(阿波国文庫) E↓A	
67	東奥義塾図書館 X↓E	
90	宮城県図書館(伊達文庫) C↓B	
214	西尾市立図書館(岩瀬文庫) A↓B	
260	東京都立中央図書館(東京誌料) A↓B	
32	鹽竈神社 D↓A	

なお、サービス区分の内容は、A―複写可(ポジフィルム・紙焼写真・電子複写)

B―複写可(紙焼写真・電子複写)
 C―複写可(ポジフィルム・紙焼写真・電子複写)ただし、原資料所蔵者の事前許可が必要
 D―複写可(紙焼写真・電子複写)ただし、原資料所蔵者の事前許可が必要
 E―複写不可(館内閲覧のみ可)となっており、サービス区分C・Dのものは、当館より原資料所蔵者へ複写サービス許可申請を行います。

◆紙焼写真本の分類記号と配置について

(1)分類記号	(2)配置
紙焼写真本請求記号のアルファベットは、分類記号です。分類記号は、次のとおりです。 (国文学関係) (その他)	I..漢詩・漢文 R..芸術・芸能 S..雑著
A..文学総記	開架分(三階閲覧室)は次のとおりです。
B..歌謡・詩	A1↓
C..和歌	B201↓
D..連歌・俳諧	C7001↓
E..物語・小説	D4001↓
F..随筆・日記	E4001↓
G..思想文学・評論	K401↓
H..劇文学	
Q..民俗・風俗	
J..一般総記	F1001↓
K..国語	H1↓
L..漢籍(経史子)	I401↓
M..漢籍(集)	J1↓
N..歴史	
O..思想	
P..地誌	

◆土曜日の資料利用について

昭和六四年一月から国の行政機関の土曜閉庁(第二・第四土曜日)がスタートしましたが、当館は、国立大学等と同様に閉庁機関となり、毎週土曜日は閉庁しておりますが、限られた教職員しか出勤しておりません。
 そのため、土曜日(特に午後)は、当館内の研究室のほとんどが閉室となり、研究室で使用中の資料は閲覧サービスに出せない場合がありますので、御了承下さい。

平成二年度秋季学会開催一覽

①事務局 ②学会開催日 ③会場

解釈学会 ①〒101 千代田区神田柳保町2-46教育出版センター内03-3239-5438 ②11月3日 ③名古屋市教育館

歌舞伎学会 ①〒169 新宿区西早稲田1-6-1早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②12月1日 ③学習院大学百周年記念会館

訓点語学会 ①〒192-03 八王子市東中野742-1中央大学文学部国文学研究室内0426-74-3789 ②10月18日 ③金沢市文化ホール

計量国語学会 ①〒167 杉並区善福寺2丁目東京女子大学3号館118号室03-3395-1211内339 ②9月21日 ③東京女子大学

国語学会 ①〒113 文京区本郷7-3-1東京大学文学部国語研究室内03-3812-2111 ②10月19、20日 ③金沢文化ホール

昭和文学会 ①〒101 千代田区猿楽町2-2-5笠間書院内03-3295-1331 ②10月12日 ③昭和女子大学

説話・伝承学会 ①〒603 京都市北区小山上総町大谷大学内075-432-3131 ②11月9、10、11日 ③滋賀県伊吹町

説話文学会 ①〒168 杉並区永福1

-9-1 明治大学和泉校舎法学部林雅彦研究室内03-3322-3151 ②9月21日 ③国文学研究資料館

全国大学国語教育学会 ①〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1兵庫教育大学言語系教育研究室内0795-44-1101 ②10月18、19日 ③群馬県生涯教育センター

全国大学国語国文学会 ①〒101 千代田区猿楽町1-3-1桜楓社気付03-3295-8774 ②10月12日 ③愛媛大学

中古文学会 ①〒102 千代田区三番町6二松学舎大学文学部国文学科研究室内03-3261-7406内260 ②10月19、20日 ③就実女子大学

中世文学会 ①〒192-03 八王子市東中野742-1中央大学文学部国文学科研究室0426-74-3789 ②10月12、13、14日 ③愛媛大学

日本演劇学会 ①〒169 新宿区西早稲田1-6-1早稲田大学演劇博物館内03-3203-4141内71-5218 ②11月17日 ③近畿大学芸学部

日本音声学会 ①〒110 台東区東上野3-25-6蒼洋社ビル5F03-3839-3957 ②9月28、29日 ③大阪樟蔭女子大学

日本歌謡学会 ①〒630 奈良市高畑町奈良教育大学真鍋研究室内0742-27-9153 ②10月26、27日 ③三重県亀山市文化会館

日本近世文学会 ①〒184 小金井市貫井北町4-1-1東京学芸大学国語教育学科古典第6研究室内0423-25-2111内2311 ②11月30、12月1日 ③鹿児島大学

日本近代文学会 ①〒150 渋谷区東4-10-28国学院大学文学部日本文学第8研究室内03-3409-0111内538 ②10月25、26日 ③梅光女学院大学

日本語教育学会 ①〒107 港区赤坂1-8-10第9興和ビル内03-3584-4872 ②10月5日 ③同志社大学今出川校地

日本社会文学会 ①〒102 千代田区富士見2-17-1法政大学文学部西田勝研究室内03-3264-9751 ②11月15、16、17日 ③沖縄県那覇市民会館

日本比較文学会 ①〒150 渋谷区神山町30-2-20603-3468-2461 ②11月8、9日 ③福岡女学院大学

日本文学協会 ①〒170 豊島区南大塚2-17-1003-3941-2740 ②11月23、24、25日 ③法政大学多摩校舎

日本文学風土学会 ①〒214 川崎市多摩区東三田2-1-1専修大学文学部国文学科内044-911-7131 ②11月9日 ③専修大学

日本文体論学会 ①〒110 台東区下谷1-5-34三修社内03-3842-1711 ②11月15、16日 ③愛知淑徳大学

日本方言研究会 ①〒115 北区西ヶ丘3-9-14国立国語研究所気付日本方言研究会幹事03-3900-3111 ②10月18日 ③金沢大学(金沢市文化ホール)

俳文学会 ①〒663 西宮市戸崎町1-13武庫川女子大学第三学舎島津忠夫研究室内0798-67-0079 ②10月26、27、28日 ③都留文科大

万葉学会 ①〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138大阪市立大学文学部国語国文学研究室内06-605-2413内4 ②10月26、27、28日 ③光華女子大学

和漢比較文学会 ①〒228 相模原市文京2-1-1相模女子大学国文科第3(矢作)研究室内0427-42-1411 ②11月16、17日 ③相模女子大学

国文学研究資料館報 第三十七号
平成三年九月発行
編集・発行者
国文学研究資料館

東京都品川区豊町一、一六、一〇
郵便番号 一四二
電話 三七八五七三二一(代)
印刷所 株式会社 三興